

榎の茂太郎が小原恵吉に呼ばれて、庄平の意向を伝えられた。

第三夜目の長老会議へ出かける途中の徳左右衛門が榎の茂太郎に襲われ、重傷を負った。

シゲは、徳左右衛門の不意を襲って何者とも知られないうちに、路傍の用水路へ押し落とすていどのいやがらせでいいといわれていたのに、いっぞやの恨みが骨の髄まで浸みこんでいるものだから、背後から堂々と名のりを上げ、徳左右衛門のすねを棒っ切れでかっぱらい、用水路に落ちた驚

さんには非常にお気の毒であります、花ノ根としては今後、大川のカミの橋のコンクリート化を強力に推進するとともに、あわせて谷川の橋の着工も陳情してゆきたいと考えるものであります」

庄平のこのことばで長老会議の結論が出たよ
うなものであった。
庄平が手を打つと、さつそく酒が運ばれてきたのはまことに奇怪なことであった。

正月のあいさつ会ならいざ知らず、普段の長老会で酒が出るなどということは、かつてなか

きと痛みに叫び声をあげて用水路の底に立ち上がった徳左右衛門の頭をさらになぐりつけた。まことシゲはこの花ノ根きつてのナラズ者であった。

架橋派のリーダー格となっていた徳左右衛門のいない長老会議で、架橋派の意気は上がらなかった。橋はやっぱり村費で架けるべきだという結論に傾き、庄平と多山健吾はちらりと顔を見合した。

「村の土木事業というものは、スジを通してや
つてこそ意義があるのであります、徳左右衛門

ったことであった。一座は驚きと喜びでざわついた。

「気にしないで飲んでいただきたいものであります。花ノ根が今度も割れずに一つにまとまる
とができましたのは、みなさんの良識によるものと感謝にたえません」

カミノイリの少年は橋がないから、死んだのであるか。もし、ハヤを追っていた少年の足が筋硬直を起さなければ、溺死することもなかったであろうし、これまで橋がなくてシモノナガレとシ

モノカミの人間で谷川の往復に困った者がいたであらうか。

二派に分かれて頭を悩ましていた顔役たちも

酒がはいるにつれて融和しはじめた。

「大川のカミの橋、ほんとうにコンクリートにするために大規模な陳情運動を展開するつもりなのでありますか」

健吾村議は押えた声で庄平の耳にささやいた。

永久的なコンクリート橋になってしまえば、

健吾はもとより、庄平のふところにも響いてくるものが小さくなかった。

庄平はあいまいに手をひらひらさせて、

「健吾君、まあ一杯いきなさい」

と酒盃をさした。二人は何げないふりで乾杯した。

「私はたまたまなくイヤであります。私にはいたずら盛りの子供がおります。こんどの水死事件は、このように私たちが酒をくみかわすことで済まされてよい問題であるとは考えられないのであります。どうしてみなさんはそのように平気で酔っていられるのであるか、私には不思議でなりません」

へやの隅の方から立ち上がって叫んでいるのは、

二本松の藤人であった。

「あなたはもう酔っぱらったのでありますか」

「せっかくの酒の席で、せっかくまとまった席でそのようなわめき声を上げるとは、それは極道にすぎようというものであります」

まわりの者がしきりに藤人を引きとめたが、

藤人は左足を引きずり引きずり上座の床の前に進み、

「私は自分の夢にも酔っているとは考えてほしくないのであります」

と怒鳴った。つづけて、

「私は、何やら今夜ほど情けない思いをしたことはありません。私は木を出せといわれれば木も出しましょう、石を出せといわれれば石も出しましょう。ここにおられるみなさんが、全く橋を架けるつもりがないのでありますならば、誓います。私が出します。資材も費用も私が出します。誓ってウソは申しません」

とたんに座が白けてしまった。二本松の藤人はいいたいことだけをいうと、びっこを引き引き退

座ざしていった。

一同いちどう、驚おどろいた。“二本松にほんまつの茶ちゃづけ”という俚諺りげんによって概念化がいねんかされていた藤八一家とうはちいつかの吝嗇りんしよくぶりによって概念化がいねんかされていた藤八一家とうはちいつかの吝嗇りんしよくぶりが、こういう型破りかたやぶな場面ばめんで覆くつがえされるとは誰だれも考かんがえていなかったからだ。

八郎はちろうが考かんがえた橋はしの建設けんせつに対して、私財しざいを投とうじてもという援助えんじよを申し出たのは、二本松にほんまつの藤八とうはちだけではなかった。まるで花ノ根はなのねとは関係かんけいもないカワラ木の製材工場主せいざいこうじょうぬし、つまり犬井八郎いぬいはちろうの雇やとい主ぬしである。わざわざ娘むすめを連つれて、どのあたりに架橋かきようする。

カワラ木きでどれほどの分限者ぶんげんしやか知れませんが、八郎はちろうさんはこの花ノ根はなのねの若い衆しゆうであります。その八郎はちろうがまた、あの高慢こうまんきわまりない娘むすめにべたべたと親切しんせつにして、いったい何なんということでありましよう」

ソノがこれほど怒おこったということは、彼女かのじよの二人ふたりの娘むすめがどれほど八郎はちろうとこのカワラ木の娘むすめに對たいしてじりじりとしたやり切れなさを味あじわったかを、表現ひょうげんしつくしている。やや内攻性ないこうせいの強い姉娘あねむすめは、涙なみだをにじませてふさぎこみ、二階にかいの自室じしつに閉とじ

るのが、花ノ根はなのねとして最も効率的もつとこうかてきなのかを調しらべるために、花ノ根はなのねのシモノナガレにやってきた。第一だいいち礼装れいそうで着きかざった工場主こうじょうぬしの娘むすめは、中村なかむらソノの店みせの前まえへ通りかかっても頭あたまも下さげようとはしなかった。花ノ根はなのねでこそ中村なかむらソノは女丈夫じよじやうぶとして畏敬いけいを受けているが、カワラ木の娘むすめにはそんなこと感かんじられるはずもなかった。おソノ後家ごけが、その娘むすめのことをどう思おもったかは想像そうぞうに余あまりあるうというものである。

「まあ、なんと愛想あいぞのない娘むすめでありましよう。

こもってしまったし、姉あねに比ひして外向的傾向がいこうてきけいこうの強つよい妹いもうとの方は、八郎はちろうを張はり合あうことで對抗意欲たいこういよくを燃もやし、ろくに口くちもきかなかったライバルの家うちを訪おとずれて、さんざん娘むすめの悪口わるぐちを叩たたいた。

どう見ても自分じぶんたちより美うつくしきにおいて優まさっていると思おもわれる他部落たがらくの娘むすめの出現しゆつげんは、花ノ根はなのねの娘むすめたちにとって直接的ちやくせつてきであれ、間接的かんせつてきにであれ、みんなあるていどのショッキングな事件じけんであった。

八郎はちろうが、この製材工場主せいざいこうじょうぬしの娘むすめと結婚けつこんし次代じだいの

工場主となるのであろうといったまことしやかなウワサが、すぐさま花ノ根に広がった。

「やっぱり、八郎はゼンガクレンだったのに違ひありません。私の娘を二人とも瑕ものにして：」

といったのは中村ソノである。ライバルの木戸ゆいもこの八郎に対する評価については異論を立てなかつた。おゆい後家は八郎のことを初めからゼンガクレンと思つていたので。

八郎を非難する共通の広場ができたことによ

将来の土木事業について村費をつかうことに何の支障にもならなくなる——これらが反対しない理由であつた。

しかし、これらの人まかせ主義に徹した考え方に対して真つ向から反対したのは、もちろん二本松の藤八である。

藤八の言によれば、花ノ根の住人、なかんづくシモノナガレとシモノカミの人間しか恐らく通行しないであろう橋を架ける費用を、他部落のカワラ木の人間に出させることは、そのまま、カワラ木

つて、めでたくおソノ後家とおゆい後家は手を結んだのである。二人が再び相反目し、お互いに悪口をいい合い、小競り合いするに到るのは遠い日のことではないにしても、このところは一応手をにぎることになつたのであつた。

カワラ木の製材工場主が架橋の費用を提供しようとすることに、花ノ根村の顔役たちは必ずしも反対しなかつた。第一に自分たちのふところが少しも痛むことがなかつたことと、第二に、個人の出費によつて架橋から？

の住人に対して花ノ根の人間が頭が上がらないことになることでもある。

「いやあ、情けない。こんな花ノ根で生まれ育つてきたことが私はいっそ恨めしい」と、二本松の藤八は歎くのである。

三野庄平は、カワラ木の製材工場主に出費してもらつて橋をかけるか、二本松の藤八の篤志に頼るか、それを決定するために、またもや長老たちを集めねばならなかつた。

(以上9月3日放送分)